

トランプの家の迷子たち

人物

光子 六十三才 トランプ占い師

平太郎 七十才 光子の夫

昭 二十四才 サラリーマン

敏子 二十五才 OL

幸子 二十才 学生

笑子 十才 小学生

作造 七十六才 隣の老人

風太郎 二十六才 光子、平太郎の息子

子

中年の女の客

酒屋のご用聞き

労務者風の男 A B C D E

嵐の夜の、若い女、婆さん、魔女

範子 四十三才 二十年後の昭の妻

妙子 十二才 二十年後の昭の娘

幕は上がっていない。川のせせらぎ。昭、下手から登場。

昭 この川の音おぼえてる。

小鳥のさえずり。鶯の鳴き声。

昭 自然のハーモニーやなあ。

昭、舞台中央に進む。

昭 確か、このへんやと思うんやけど……。行く川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらずか……。それにしても、二十年か……。月日は、ほんま、飛ぶように過ぎて行くなあ……。

昭、客席の方を見る。

昭 向こう岸に、ひょいと背中押したら、川に落ちひんかいな思うほど、川の際きわに、三軒続きの長屋があつて、その真ん中の家の二階に、赤い字でトランプ占いちゅう、ガクツと片っ方の肩落としたような傾いた看板がかかつてた。

(間)

みんな、あの時は、トランプの家に集まった迷子やつたんやろなあ。一時いとき、集まって、ほんで、また、ようけの人に紛れてしまった。

川のせせらぎ。

昭 こうして、耳傾けると、川の音があん時のいろんな人の声に聞こえてきよる。まるで、遠い昔から、僕を呼んでるようや。

声にならない人のざわめき。

バイオリン演歌が小さく流れ出す。

光子の声。最初は小さく、次第にはつきりしてくる。幕があく。

トランプ占い師光子の仕事場兼居間。中央に二階への階段。下手のかまちに敏子。

光子が中年の女性を占っている。

昭、笑子はその後ろで占いの順番を待っている。

光子 奥さん、この縁談、あきまへん。

中年の女性 え、あきまへんか。

光子 何にもせんでも、十日もせんうちに潰れます。

中年の女性 気に入った。(膝を叩く) はつきり言わはる。他の占いみたいに、当たり障りの無いことしか、言わへんのとちこて、この先生は、バシと言わはるてきてきたんやけど、ほんまやわ。実は、うちの義理の姉の旦那の、妹のお母さんが、

光子 お宅のお母さん違いますの？

中年の女性 まあ、そうも言います。

光子 奥さん。

中年の女性 へえ、他にもなんか？

光子 三百円。

中年の女性 あ、すんまへん。百円、二百円、三百円、ほな、みなさん、どなたはんも、お先に。

中年の女性、金を畳の上において、下手のかまちから姿を消す。

平太郎、階段を降りてくる。

光子 お父ちゃん、風邪どうや？

平太郎 ぼちぼちや、のど乾いたよって、水のもと思つて。

光子 後から、玉子酒でもつくつたげる。

平太郎 おおきに、そや、テレビで台風くる言つてるで。

光子 さつき、それる言つてたんちがいますの。

平太郎 それが、急に気変わらしたらしい。それにしても、まだ、お客さんようけいたはる。皆さん、こんなむさくるしいところ、ようおいでで、ほんまにおおきに。(かまちの敏子を見る) お嬢ちゃん、そんなたたきにおらんと、上にあがり。

敏子 ここでいいです。占つてもらつのと違いますから。

光子 さつきから、何回も言つたやけど。雨宿りさせてもつてるだけやからって。お尻冷えるのええことないんよ。

下手から、酒屋のご用聞きが入ってくる。

御用聞き えらいこつちゃ、近鉄とまってまっせ。

光子 なんて、まだ、雨が降ってるだけで、風なんか吹いてへんに？

御用聞き 事前の策言うやつちやいまつか。下手に走らして、なんどあつたら、会社の責任や思うてますのやる。石橋叩いて渡らんもええけど、せこおますなあ。嵐の中を疾走する夜汽車。健さんが、哀愁を帯びた目で窓の外に目をやっている。

光子 その目は、どう見ても、秋刀魚を狙うネコの目や。

御用聞き あきまへんか、けんはけんでも、刺し身のけん。

平太郎 嵐、嵐いうたら、わし、電車の中から、雷、ぼん、ぼん、落ちよんのん見たことある。大和の三輪さんの縁日からの帰りやつた。急に電車が止まってしもて。みなはん、雷いうたら、空にペケペケと光って、ちよつと、間おいて、ドドンと思てまっしやる。それは甘い。目の前に落ちるやつは、全然違う。真っ白い火柱や。バーン、バーン

光子 あんた、ほんまに風邪ひいてんの。

平太郎 うるさい、いまええとこや。

光子 うるさい…

平太郎 かんにん。もつちよつと喋らして。とにかく、まっすぐに空気引き裂きよる。そのたんびに、キヤーと悲鳴が上がる。女は男の胸にしがみつく。わしは、誰もいてへんから、キヤ言うて、手すりにしがみつく。

御用聞き ええおっさんがキヤでつか。

平太郎 せやかて、怖かってんもん。

御用聞き しょうもな、わしも、はよいなな。ほな、醤油一本と、菊正一本。それに、空瓶代。(光子に小銭を渡す) 奥さん、板はらんで大丈夫でつか？

光子 大丈夫、大丈夫。生駒さんが守ってくれはるさかい。それに石切さんもいたはる。それに、お父ちゃんも…。そんなところでばーとしてんと、はよ寝なさい。自称病人なんやる。

平太郎 自称て…。ほな上がるわ。

御用聞き下手に退場。

平太郎階段を上がりかける。

光子 お父ちゃん。

平太郎 ……(振り返る) なんや？

光子 東京、大丈夫やるか？

平太郎 なにが？

光子 何がて、台風やがな。

平太郎 そんな、近畿にもまだ来てへんのに。

光子 セやかて、英世が心配で。

平太郎 英世？

光子 自分の子供の名前忘れて、どうしますの。

平太郎 ああ、英世なあ。テレビで東京の様子見てきたるわ。

平太郎階段を上がっていく。

光子 うちの息子、英世言いますね。子供の頃は、野口英世みたいでいやや、言うてましてんけど、医者卵になってからは、ええ名前やなあなんて、勝手なことを…。

笑子 うち、お医者さんきらい。注射するもん。

光子 大丈夫、うちの英世は注射も上手。全然痛いことない。それに、ほんま、親孝行で、はよ、一人まいの医者になって、お母さんに楽させるいうんが口癖で、それに、男前。

昭 あのう、

光子 え、

昭 お話中、すみませんけど、本職の方に戻ってもらわれしまへんやろか。台風も来てるそうやし。

光子 分かってま。

風の音

昭 気のせいかもしれへんけど、ちょっと、吹いて来たみたいや。

この家大丈夫やるか？

光子 気にいらんだら、出て行つてもうても、かまへんけど。

昭 そういう意味ちゃいます。僕はすぐに思えることが口にできるたちで。気にさわつたら、すんまへん。

光子 英世やつたら、人の気にさわるような事は言わへん。ほな、次の人。

昭 (にじりてる) 僕です。

光子 ちいちゃい女の子、差し置いて、ええ男が、僕ですやなんて、お嬢ちゃんどうぞ、わしは一番後でええて、一言いえんのかいなあ。英世やつたら、

昭 僕、英世と違います。

光子 セやなあ、あんたは、ひでーえよやなあ。

昭 (あとずさりして) 何で他人にこんな事言われなあかんのや

ろ。

光子 お嬢ちゃん、おいで。何処から来たん？

笑子 阿倍野。

光子 えらい遠いところから一人で。

笑子 (頷く)

光子 かわいらしいネックレスして。

笑子 (首にかけた鎖を引っ張り出す)これ、お家の鍵や。

(間)

光子 ほんなら、ここに、占う人の生年月日と、お名前書いて。

笑子 生年月日しらん。

光子 ほな、お名前は？

笑子 タマちゃん。

光子 猫みたいな名前やな。

笑子 猫や。

(間)

光子 猫かいな。ほんで、オスなんかメスか？

笑子 しらん。

光子 性別不明と。

笑子 おばちゃん、タマおらんようになってしもてん。うち、心配

で。

光子 いつからやのん。

笑子 えええっと、木曜日。

光子 三日前やなあ。

笑子 引っつも、うち、家に帰ったら、ずーとタマと遊んでたん

や。

光子、トランプをきり始める。

光子 お母さんは？

笑子 お仕事。

光子 お父さんは？

笑子 (下を向いて)……。いてへん。

光子 おばちゃん、アホやなあ、いらんこと聞いて。ほんで、どん

な猫や？

笑子 白と黒。片っぱうの目の回りが黒うて、尻尾がないねん。西

瓜が好きで、お風呂が嫌い。

光子 お風呂にいった事あるの？

笑子 うん。(泣き声になって)もう、絶対、お風呂に入れたり、顔に袋かぶせたりせえへんから。ひげもひっぱらへん。それに、昭 まだあるんかいな。そら、猫も家出したなる。

光子 うるさい、気が散る。

光子、トランプを並べる。

笑子 学校からかえって電気つけたら、いつつも、うちの足にじゃれつくのに……。どこにもおらへんねん。(泣く)お母さんに言うたら、明日一緒にさがそうって。

光子 ほんで、お母さんと捜したん？

笑子 ううん。また今度さが言うて、お仕事に行かはった。ほんで、うちだけで捜したんや。団地の一階から、八階までの廊下、タマ、タマ！。

敏子、たたきから居間に上がり、笑子を見つめる。

昭 タマ、タマ言うたん。その猫はオスやなあ。

敏子 ちやかさんというて、かわいそうやないの。

昭 すんまへん。せやけど、なんでこんなぼろかすに言われなあかのやる。帰りとうなってきた。えらいとこ来てもうた。

敏子 八階建ての団地で、猫が迷うてる。みんなおんなじドア。

光子 同じドアでも、その向こうにある生活は、どれ一つとして、同じもんはあらへん。考えたら、不思議なもんや。

笑子 うちが目つむってても分かるよ。私のお家やもん。お母さんと、私のおいがするもん。

(間)

敏子 一人でよう来たね。

笑子 前にお母さんと、石切さんに来た事があるの。そんな時、川の向こうに、トランプうらないって書いてあるやろ、あそこの占い、よう当たるんやて、お母さん教えてくれはった。

敏子 台風来る言うてるし、お母さん心配しはらへん？

笑子 タマのおるところを占ってもらいに、石切さんに行きますて、手紙書いてきたから大丈夫です。

光子 しっかりしてるなあ、お嬢ちゃん。ほんで、この猫、ひろたんと違う？

笑子 うん。公園で。

昭 もろたんや言われたら、どうするんやろ？
敏子 ちやかさんといて、今大事なときやから。
昭 ちやかしてへん。ほんまにそう思たんや。えらい、商売やな
あ。

光子、一心不乱にトランプを切り、並べる動作を繰り返す。
昭、敏子、呆然として、光子の手元を見つめる。

敏子 きれいやなあ、トランプが生きてるようや。

昭 ほんま、キングやクイーンが踊っているようや。

敏子 (笑子の肩を抱く) きつと見つかるよ、タマ。

笑子 (光子を見て) おばちゃんの顔、こわい。

敏子 こわいことあらへん。あんたの為に、一生懸命占うてくれた
はんねんさかい。

光子 ひろた公園にいる。

笑子 何回も捜したけど。

光子 大丈夫、生まれたところに帰るて出てる。

笑子 お母さんは、公園にほかされたんや言うてはった。

光子 お嬢ちゃんが、公園でひろたんやろ。それやったら、そこが
生まれたとこや。

昭 大きな公園か？

笑子 ううん、ちっちゃい三角公園。

敏子 うちも一緒に捜したげる。一人で捜して、見つからへんたら
かわいそや。

光子 うちの占いが、あたりへん言いますんか。

敏子 いいや、そんな意味やのうて…。阿倍野は、帰り道になりま
すから。それに、もう来はらへんやろうし。

光子 誰が？

敏子 (あわてて) いいえ、なんでもありません。

笑子、三百円を光子の前におく。

昭 (のりだして) 子供は半額ちやいますの？

光子 占いに、子供も大人もあらへん。せやけど、猫やから、百円
まけといたげる。

笑子、立ち上がるうとして、ふらつく。

光子 どないしたん。

笑子 ちよっと、しんどい。タマ…

笑子、座り込む。

光子 そら、あかんわ、二階で横になるか、（立ち上がり、二階に向かつて叫ぶ）お父ちゃん。

平太郎、階段から顔を出す。

平太郎 なんや。

光子 （笑子の額に手を当てながら）この子、気分悪いんやて、下は狭いよって上で寝かしたげよ思うやんけど。

平太郎 そらえらいこつちゃ、わし、寝間ひいたる。

敏子 うち、抱いて上がります。

光子 そうか、頼むわ。

昭 僕、医者呼びに行きましょか？

光子 熱もないし、顔色もそんな悪ない、暫く様子みよ。

敏子、笑子を抱いて階段を上がる。

昭 子供も色々やなあ。憎らしいガキもおるけど。

光子 なに言うてますの、子供は、親の鏡やで。

昭 ほんなら、おばさんの鏡が、英世さんか。

光子 もつたいない。せやけど、兄ちゃん、初めてええこと言うてくれた。英世がうちの鏡やて、ほんま、うれしい事言うてくれる。（二階へ上がるうとする）ちよっと様子見てくる。

敏子、階段を降りてくる。

敏子 おばさん、大丈夫です。あの子、お中すかしてるだけです。

敏子の後ろから平太郎が顔を出す。

平太郎 毎日、五十円ずつ、おやつ代もろてるんやて、土曜日は給食ないよって、二百円。猫おらんようになってから、うちへこよう思て、金貯めててんやて。そんで、今日は朝食べたきり。目も回るわな。

光子 かわいそうに、子どもはお中すかしてんのが一番かわいそうや。何にもあらへんけど、おにぎりでも。そや、台風来る言うてるし、それに電車も止まってるし、（敏子と昭の方を見て）うちの分も、ご飯あるだけ握ってしまお。

光子 私は…。

光子 袖振り合うもなんとか、遠慮する事あらへん。
昭 僕、梅干しあきまへんね。

光子 はい、はい、何にも入れしまへん。

敏子 うち、手伝います。

光子 え…。(間)そうか、ほんなら、手つどうてもらおか。

平太郎 危ないから、外でたらあかん言われたら、家で猫と遊ぶし
かないわなあ。なあ、光子、何処ぞにのらくるみたいいな猫おらへ
んやるか？

光子 のらくるみたいいな人やったら、心当たりありますけど。

平太郎 ……

光子、敏子、上手に消える。

下手から、作造が入ってくる。

作造 何時もやったら、うるさいくらいにおる鳩、一匹もおらへ
ん。空も、急に夜みたいにくるうなったり、蛍光灯の紐ひっぱっ
たみたいに、ふうつと、明かるうなったり、けつたいな天気や。
ほんで、かだだが湿るような細かい雨が降つとる。

平太郎 こんな天気でも、作やん、石切さん参ってきたんか？

作造 そうや、毎日の、たった一つの楽しみやもん。下るんも一歩
ずつ、上がるんも一歩ずつ、途中で死ぬかもしれへん。

平太郎 そんなことあるかいな。あんたは元氣やさかい。それに比
べたら、わしはあかん、何時も病氣ばかりや。

光子 (台所からの声) いいや、お父ちゃんは元氣やで。

平太郎 何を言うか、この病弱つかまえて。

おにぎりの皿を持って、光子上手より。

光子 この前の、隣のぼやで、長屋でいちばん最初に飛び出したん
は、お父ちゃんやさかい。

平太郎 ……。

作造 そやさや、枕抱えて、音川に落ちてんなあ、平さん。

平太郎 熱出てきたみたいや、二階で、寝てるわ。

光子 これ、もって行つたつて。(皿を平太郎の目の前に) ちよっ
と、お父ちゃん、このおにぎり見て。

平太郎 うまそうやなあ。

光子 どうや、綺麗に同じ大きさの三角おにぎり。あの娘、にぎっ
たんやで。上手やる。おにぎり一つ握るの見てても分かる。苦勞
してるわ、あの娘。

作造 お客さんか？

平太郎・光子 (顔を見合わせて) さあ…。

平太郎 ほな、持っていったるわ。ほんま、ゆっくり病気もしてられへん。

平太郎、ふらつきながら、階段を上がる。

作造 わしも、暇やなあ。病気にでもなるか。

光子 がまの油売り、また、やらはったら？

作造 もうじき、八十やで、お光はん。ほんまに手切ってしまうがな。

光子 (昭の方を見て) 兄ちゃん、ここは、昔、五目長屋言われてなあ、もう一つ同じような長屋が続いてて、石切さんの参道で、いろんな芸や、露店や、占いを生業とする人が住んでて、ほんまに色々混じった五目ご飯みたいやったんや。

昭 猿回しもおったんやるか？

作造 おった、おった。せやけど、あの芸は、はじめは面白いけど、段々悲しうなってくるなあ。

昭 自分が猿回してるんか、猿に回されてるんか。

作造 いいや、回ってる猿と自分が一緒に見えてくるて、あの男よ言ううとった。猿が死んだとき、あいつ、自分の首に輪つか作つて、作やん、このひも持って、わし回して言うて、子供みたいに、わあああ、泣きよった。一人で、猿回しはできへん。ほんで、生駒山に猿探しに行ったまんま、帰ってきよらへんだ。

(間)

わしらは、道ばたが舞台やった。そや、晴舞台や。陣中膏の旗をたてて、さあさあ、御用とお急ぎのない方はゆつくりときいておいで、遠目、山越え、笠の内、きかざる時は物の文色と道理が判らぬという。遠くから見たり、人の頭越しに覗いてたんじゃ何のことかわからん。さあ、遠慮はいらないから遠くの人は近くへ、近くばよって目でごろうじろだ。ただいまよりは陣中膏はがまの油売りの始まりだよ。「さあて、お立ち会い」手前、ここに取り出しましたのは、陣中膏は四六のガマだ。縁の下や、そんじよそこらにいるガマとはガマが違う。あんなものには薬石効能がない。手前のは常陸の国は関東の霊山、筑波山で獲れた四六のガマだ。四六、五六はどこでわかるか。前足の指が四本、後足の指が六本。これを名付けて暮は四六のガマ。一年のうち、五月、六月、八月、十月に獲れるところから、一名五八十(ごはっそう)

の四六のガマとも言つ

光子 うまいもんや、ひとつも衰えてへん。

作造 聞いてくれる客がおらんようになっただけやるか？せやけど、息もきれるわ。

作造、客席の後方を見る。

昔は、石切さんの坂道、走って上がったも、なんも、息一つ切れへんだ。(間)。せやけど、光子はん、自分だけが、辛い思たらあかん。こんな天気やのに、ようけの人がお百度参りしたはる。わしは、もう、お百度よう踏まんよって、

百度紐を取り出す

作造 皆はんと同じように、一本一本勘定するんや。あの人の願いかなえたつてや、今度はあの人やでえ思て。あんなに、一生懸命参ったはんねんから、きつと、病氣ようなるやろつてなあ。参ったはる人見ながら、ときどき思ふ事あんねん。顔がみんなちやうように、生きるんも、死ぬんもそれぞれや。人の一生でなんなんやろ？明日にでも分かる氣がするんやけど、こんな歳まで生きてきても、なんも、わからへん。

(間)

せやけど、わしが病氣なつたら、誰か石切さん参つてくれはるやろか？

光子 立派な息子さんがいたはるやんか。

作造 大きな病院に入れてくれるかもしれへん。立派な葬式だしてくれるかも知れへん。せやけど、誰も石切さんに参つてくれへん氣がする。誰ど石切さん参つてくれるやろか？

光子 うちの方が先に行くかも知れへんけど、せやなかつたら、うちが参つたげる。お百度踏んだげる。

作造 おおきに、おおきに、わし、石切さんに抱かれて死ぬねん。

舞台が薄暗くなり、風の音。

作造 台風来そうやなあ。ほな、帰るわ。

光子 一人で怖かつたら、おいでや、おんなじ長屋やからうちの方が大丈夫や言う事あらへんけど。人が多いよって、にぎやかや。なんかあつたら、壁たたき、すぐに行つたげるから。

作造 わし、見たいなあ。

光子 何を見たいの？

作造 わしのためにお百度参りしてくれる人を、いつもの石の上に腰下ろして、お百度紐勘定しながら、その人の姿、見てたいなあ。

バイオリン演歌が小さく流れる。作造、二階を見上げ、しばらく佇むが、下手に消える。

光子 あれ、気のせいやるか。バイオリンの音がしたような気がしたけど。

昭 ほな、うらのうてもらおっと。

光子 それどころやあらへん、台風や、病人やて忙しいんやから。台風来たら、男手がいるよつて。こんな時に英世が居てくれたら、どんなに気丈夫か。さて、うちは、お父ちゃんの玉子酒つくる。そらそつと、東京大丈夫やるか？

光子上手に、入れ違いに敏子が入ってくる。

敏子 風も強ようなつて、雨の音も。それに夜みたいに暗うなつて…。

昭 ほんまに来そうやなあ。えらいこつちゃ、ほんまにこの家大丈夫やるか？飛ばされたら、川の中や。

敏子 うち、金槌。

昭 僕も、おかあちゃん。

敏子 おかあちゃん…

昭 なんか、家が揺れだした。

光子、上手から登場。

光子 心配せんでええ、そよ風でも、うちの家は揺れるんやから。

昭 台風やったら、飛んで行くんちゃいまつか。まだ、死にとうない。

光子 たいそな子やなあ。大きく揺れるだけで倒れへん。うちの家は柳と一緒に。

二階から、バイオリンの音。

光子 空耳ちごうた、珍しいなあ、お父ちゃんがバイオリン引くやんて。

昭 ええ音やなあ、途切れそうで、途切れへん。
光子 大正の頃のバイオリン。お父ちゃんは大正バイオリン言うてる。

敏子 風に乗って聞こえてくるようや。

3

暗転。上手にスポットが当たる。
バイオリンを弾く平太郎。
すわって聞く笑子。

平太郎 八八、のんきだね！
のんきな父さんお馬の稽古
馬が走り始めたらとまらない
子どもは面白そうに父さんどこへゆく
どこに行くのかお馬にきいとくれ
八八、のんきだね

笑子 (拍手しながら笑う)
平太郎 のんきな父さんの坊やが裸で
かあちゃんが着物を着よと叱っても
坊やはイヤダと言って着物を着ない
「ちよいと父さん坊やが裸で困りますわよ、」
「なんだなんだ……」
「坊やが風をひいたらどうするんだ」
出て来た父さんも丸裸
八八、のんきだね

笑子、笑い転げる。
光子、スポットに入ってくる。

笑子 おじちゃん、もう一回、もう一回。
光子 お父ちゃんえらいもててるやん。
平太郎 まとわりついて、離れへんねん。どや、わしでも猫よりましやる。

光子 お嬢ちゃん、もう、しんどない？
平太郎 大丈夫やなあ。おにぎり、三つも食べたよって。
笑子 おいしかった。
光子 そらよかった。お父ちゃんの玉子酒できたで。お嬢ちゃん

も、下行こ。二階は、よう揺れるし、それに、サイダーあるよつて。

笑子、頷く。

光子、スポットから消える。

4

元の舞台に戻り、平太郎、階段を降りてくる。

平太郎 みんな、退屈してへんか思て、一曲、歌いにきたで。

平太郎、バイオリンを弾きながら歌う。

平太郎 おれは河原の 枯れすすき

同じお前も 枯れすすき

どうせ二人は この世では

花の咲かない 枯れすすき

敏子が歌う。

敏子 死ぬも生きるも ねえおまえ

水の流れに 何変わる

おれもお前も 利根川の

船の船頭で 暮そうよ

平太郎 なんや、遠い昔に帰っていくようや。

敏子 お父さんがお酒飲んだら、よう歌うてた。

壁を叩く音。

平太郎 (壁に耳をつける) どないしたん、

作やん。チャンチキおけさ、うとてくれてか？ほんなら、こつち

やおいで、そこやつたら、よう、聞こえへんやろ。(壁に耳をつ

ける)ここで、聞きたいやて、難儀やなあ。

月があ、あ、あ、あかん、もう声でえへんわ。又、今度な作やん。

壁を激しく叩く音。

平太郎 怒って、壁蹴つとる。わがままやなあ、作やん。そんなにするんやったらもう、作やんにうとたらへんで。

壁の音、ピタツと止まる。

平太郎 子供みたいやなあ。作やん、チャンチキおけさ、昔から、好きやったなあ。せやけど、この歌、バイオリンで弾くの難しいんやで、すぐに、弦で顔弾いてしまっへん。

光子、上手から登場。

光子 お父ちゃんが歌うやなんて珍しい事や。バイオリン演歌があかんようになってから、急に、働く気なくしてしもて……。ちよつとでも、働く気になつてくれはつたら、うちも楽なんやけど。

平太郎 せやかつて、わし、これしかでけへんもん。

光子 ……。(ふっきるように) さあ、玉子酒出来たで、兄ちゃんもついでやさかい、一杯よばれて。

昭 僕、玉子酒は…。

光子 あんたのは玉子なし。

昭 そうですか、ほな、ちよつとだけ。

光子 そや、サイダー忘れたわ。お嬢ちゃん、台所の流しの上に置いたんねん、持ってきてくれる。

笑子 はーい。

笑子、上手に走って行く。

昭 台風がなんやねん。なあ、おばはん。

光子 おばはん？

平太郎 えらい酒癖がわるそうや。

光子 わるいて、いま一口飲んだとこや。

昭 一口飲んで、回ったら、悪いんか。国会で決まったんか。それに占いなんかほんまに当たるんかいな。トランプ切つて、僕の人生分かるなら、僕の人生七並べつと、(光子を見て) あんたの人生、ばあ抜き。(敏子の方を見て) ねえちゃん、僕とデートせえへん。

敏子 いやよ、酒のみ。

停電。舞台真っ暗になる。

敏子 きゃ、いやらしい。
光子 やめなはれ、兄ちゃん。

電気がつく。平太郎、敏子の背後から、胸に手を回している。平太郎、客席の方を見て、ニヤリ。

光子 お父ちゃん。

(暗転) 15分休憩

5

昭 風、やんだなあ。台風行ってしもたんやるか？

平太郎 そんなことあらへん。テレビで、ほん近くまできてはるで。嵐の前の静けさや。

昭 ちよつと、表見てこつ。誰のかしらんけど、傘借りまっせ。

平太郎 わしも行く。

光子 病人がうるついでどうしますの？

平太郎 風邪なおつた。

光子 あかん、あかん。病弱なんやろ、お父ちゃん。

笑子 お兄ちゃん、私も行く。

光子 遠くへ行ったらあかんで、近くにおりや。

平太郎 なんや、自分の子供に言うてるようやなあ。

光子 そない聞こえますか？お父さん、あの二人、ここから見てたら、兄妹みたいやなあ。

平太郎 そうか、そう言うたら、そう見えるなあ。あかの他人には見えへん。なやみのあるもんは、みんな、兄妹かもしれへん。

光子 せやけど、あの兄ちゃんの悩みてなんやろ。あるように見えへんけど

昭と笑子下手へ。

昭、傘をさす。

敏子、光子と平太郎の横に座る。

3人が話し始めるが、客席には聞こえない。

昭 水の流れが、えらい速いなあ。

笑子 うん。

昭 あんまり覗き込んだら危ないで。

笑子 うん。

昭 タマ、見つかったらええのになあ。

笑子 うん。

昭 うんとしかいわへんのか？兄ちゃんが、男前やから、あがってるんか？

笑子 ちがう！

昭 こらっ

笑子、笑いながら駆け出す。

昭、笑子に傘を差しかけながら、笑子を追って、下手に消える。

光子 中学を卒業してから、弟さんと二人で、よう頑張ったんやね。

敏子 人にかわいそうやなあ言われのが嫌やったんです。変な同情がいちばん辛い。その人と初めておうたんは、雨が冷たい日だった。お醤油こうたんです。一升瓶でこうた方が安いよって、それと、買物籠持って、ヨタヨタしたら、

「お客さん、わしが家まで持っていったるわ」

という声が出て、後ろ向いたら、自転車に跨って、真つ赤な傘の下で、真つ白な歯して、照れたようにわろたはった。

平太郎 真つ赤な傘に、真つ白な歯。なんか他人みたいな気せえへんな。あいつ、歯だけはよかったなあ。

光子 その人は酒屋に勤めたはったん。

敏子 ええ。

平太郎 酒屋なあ。

敏子 そんなで、それから、うちにもよう遊びに来はって。弟もなついてたんです。せやけど、ふつと来はらんようになって。ほんまに、風みたいいなやと

平太郎 風。

敏子 今度おうたんは、パチンコ屋で。父親代わりに働いて、母親代わりに家事をして、ふうと、しんどうなって、ふらっと、初めてパチンコ屋には入ったんです。

平太郎 パチンコ屋なあ。

光子 そこで働いてたん？

敏子 ええ、ここでやり言うて、一杯玉だしてる人のかせて。

光子 えらいことするなあ。

平太郎 ああ、間違いないわ。たたりやでこれは。

敏子 それだけ違います。ガラス開けて、777揃うまで玉入れて

くれはった。うち、

(間)

敏子 勝ったんです。

光子 あたりまえやがな。

平太郎 それが原因で店長ともめて、店長の首締めて、パチンコやくびになつたんやなあ。

光子 誰の話ですか。

平太郎 ……。

敏子 その人、英世という名前と違います。

光子 ……。

平太郎 (立ち上がりかけて) 東京の方はどうやら、テレビで見てくださいか？

光子 (平太郎の服をひっぱり座らせる) 座ってなさい。

敏子 うちが風邪引いて寝込んだときは、三日三晩、寝んと看病してくれはりました。

平太郎 病人には優しいところがあるんやなあ。それが、たった一つあいつのええとこや。

敏子 そのかわり、疲れて、一週間寝こまはったけど。

平太郎 ……。

敏子 この春、弟に嫁さんがきました。うち、うれしゅうて、肩の荷がおりたような氣して。おばさん、うち小姑。

光子 よかつたなあ、苦勞が報われた。

敏子 ええ娘なんですよ、ほんまに。せやけど、うちのおる場所がのうなつても。会社でも、もう、十年。みんな結婚して行くのに、うちだけが残つても。男の人も、陰で、うちのこと、番茶もでがらして。

光子 見る目がないんや、その人らに。あなたは綺麗で。

平太郎 せやけど、家にも、会社にもおりにくいからいうて、なんぼなんでもあんなと…

敏子 何が辛いいうても、家がないのが一番辛い。今まで張りつめていたもんが、ぷつちんと切れて…。辛い時、淋しい時、うちの背中をそつと叩いてくれはる風みたいな人、その温もりがうれしゅうて、(そつと、敏子目頭を押さえる) おばさん、人を好きになるのに理由いります？

光子 (平太郎を見る) いいや、そんなことあらへん。

平太郎 (くしゃみをする) 誰かわしの事言うてるんやるか？

敏子 確かに、あの人は、顔も悪い、口も悪い、お金もない、頭も悪い、

光子 なんにも、そんなぼろくそにいわんでも…

敏子 酒屋にいたはった頃、忘れられへん事があります。戸をガラツと開けてはいつて来はった。うちは弟と朝ご飯食べてました。おかずがなくて、少しずつご飯にお醤油かけて…。うち、急いでお膳を体でかくした。あの人は、それを見て見んふりしてくれはった。

「ええ天気や、キャッチボールしよう」いわはった。弟と3人思いきり走って、思い切りわろて、あの時が、うちの青春。

昭、笑子、下手から

昭 なんか、又、雲行きがおかしいなってきたで。

笑子 雲が、飛行機みたいにビュンビュン飛んで行く。

昭 雨もきつなってきた。はよ、家にはいる。

笑子 川の所に誰かいる。

昭 えらいこつちゃ、あの人、川に飛び込むつもりや。あつ、ガマのおっちゃんが、女の人とめはった。

風の音、雨の音。

昭 はよ家に入り、俺も助けに行く。

笑子家につけ込む。

息を切らして、しばらく声もでない。

光子 どないしたん、えらい息切らして。

笑子 川に女の人が、ほんで、ガマがつかまえて、兄ちゃんが走って行ってん。

平太郎 なんのこつちゃ。

作造と昭に抱えられるようにして幸子下手より登場。

作造、ガマの油売りの衣装。

笑子 (作造を見て) おじちゃん、かっこいい。

作造、正面向いて、Vサイン。

幸子 飛びこもなんて思てしません。川を見てただけです。

作造 あんなに覗きこまな見えへんか？

幸子 うちの、トランプ占いの家をさがしてただけです。

昭　ここやがな。

幸子　え、川の中に看板あるって聞いたさかい。

平太郎　誰がそんなええ加減なことを。

作造　せやけど、晴れた日は、あそこから川覗いたら、おまはんとこの看板、水に映って見えるときある。

平太郎　そういうたらそうや、ようしつとるなあ、そいつ。せやけど今は曇ってる。

作造　そういうたら、せやなあ。

敏子　どんな人に聞かはったん？

幸子　枯れ木みたいに痩せた人で、風よ吹け、嵐よ来たれ、せやけど、我は動かん。

平太郎　ようするに、分けのわからん事言うてたんやな。来たで、

第二室戸や、えらいこっちゃ。

光子　風太郎、風太郎が帰ってきたんやるか。

敏子　約束守ってくれはった、風太郎さん。

激しい風の音、揺れる家。

光子　とにかく、はよ上がり。その娘ビシヨ濡れやんか。体ふかな、風邪引く。はよ、はよ、うちのであわへんやろけど、風呂場で着替え。

幸子　その前に、占うて下さい。

光子　占いより…。

幸子、光子を見つめる。

光子　分かった、占いましょ。せやけど、うちの言う事も聞き、あんたは、風呂場で着替え、うちは、あんたの声聞こえるところでトランプを切る。ええな。

幸子、光子に促されて上手に消える。

物が倒れる音。

笑子　怖い。

平太郎　大丈夫や、みんな、こつちや集まり。作やんも。（作造を

見て）せやけど、作やん、えらい格好やなあ。

作造　一人で、こわかってん。

平太郎　そうか、そうか、台風で怪我したら、あんたのガマの油一つもらおか。

作造　おおきに、平やん。十年ぶりにしとつ売れる。はよ、怪我し

てや。

平太郎 …。

幸子、上手から飛び出して来る。その後ろから、光子。

光子 その娘つかまえて。

敏子、幸子の前に立ちふさがる。

敏子 出て行っても、どこへも行かれへんよ。

幸子 行かせてお願い。お百度踏ませて。

光子 トランプがあかんだら、お百度か。何をしても、あかんもん

あかん。二人の間には、どうにもならへん川がある。

幸子 川があっても、溺れてもええから一緒に渡りたい。せやけど。

(間)

幸子 あの人、急に別れよ言わはった。腕組んで歩いたこともあらへんのに、この人と一緒になるんやてうち心に決めてた。別れる理由言ってくれへんだら、うち、死ぬ言った。

激しい風の音。電球が揺れる。平太郎にしがみついた笑子。

幸子 嫌いになつてん、あの人言わはった。嘘や、嘘や、本当の事言ってくれへんだら、屋上から飛び降りる。

(間)

幸子 そしたら、僕の誕生日覚えてるか。昭和二十年、八月七日。生まれたところは言うてへんだなあ。広島。原爆の落ちたその日に、僕は生まれたんや。今までなんともなかったから、大丈夫や思ってたんや…

光子 親御さんはご存知か？

幸子 まだ、言うてへん。

光子 親は、そんな人と結婚さすためにあんたを育てたんとちがう。

幸子 そんな人…。なんで、おばさんに、そんな事言われなあかんの。

平太郎 謝り、光子。

敏子 おばさん、ひどい。

光子 ひどいかもしれへん、せやけどそれが世間や。思てても、口にださへんだけや。きれいごとばっかりで通りますか。愛や恋やて、人の事やから、そんなうわつらな事を言うんや。あんたは自分の幸せ考えなあかん。親泣かしてどうする。あんたは、映画やテレビの主人公やあらへん。まわりも違う。うちとおんなじような世間や。越えるんやったら、最初に、うちを越えて行き。しようもないトランプ占いのばあさんを、よまいことや、しようもない言うて、まず、越えて行き。

光子、行こうとする幸子の手をつかむ。

光子 行ったらあかん。今は、あんたの中で吹き荒れてる嵐をじつと見つめなあかん。嵐が過ぎるまでここにおり。

幸子 はなして。

光子 うちの家には、ようけの迷子が来る。道にまよて、家探して、ぼろぼろになつてる子もいる。他人からみたら、しょうもない事でも、その子には死ぬほどの事なんや。せやけど、誰もその子になつてあげられへんや。うちは、学も徳もない。先生みたいに正しい道なんかよう教えんし、分からへん。うちにできるんは、たった一つ、トランプ切つて占うて、その後は、手をつないで、ほんの一時、迷子と一緒いっしょに、迷うことだけなんや。

手を振り切ろうとして、幸子、光子の顔を見る。

幸子 おばさん、泣いてる。

光子、手を離す。

幸子 おばさん、泣いてくれるの？

光子 あほやなあ、あんた、人の事でいちいち泣いてたら、涙がなんばあつても足りひん。

激しく、家が揺れる。

光子 みんな、ここに集まり、この柱が一番太い。

光子を真ん中に、幸子、敏子。平太郎を真ん中に、笑子、作造。幸子と光子の間に入ろうとする昭。

光子 兄ちゃんは、戸を押さえとつて。

しぶしぶ戸を押さえに行く昭。

敏子 お母さん。

光子 え？

敏子 お父さんが亡くなった時、みーんな帰ってしもた位牌の前で、お母さんが、うちら姉弟を抱きしめはった。あの時のお母さんのにおいと一緒や。長い間忘れてた。

光子、敏子の髪をそつと撫でる。

観客席から、風太郎登場。

風太郎 ウララ、ウララ、ウラ、ウララ、ウラのウラはオモテナの、ウラナイ、ウラナイ、ウラナイヨ、ハッー、ウラナイ、ウラナイ、アタラナイ、ハッー

風太郎、舞台に駆け上がる。

昭 こら、一生懸命、戸押さえてんのに、そんなところから入ってくるな。そこ、かべやで。

風太郎 何をごちゃごちゃ言うてるんや。わいの家や、どこからはいろと勝手やないけえ。

昭 すんまへん。

風太郎 ほんま、いつ出るんか、いつ出るんかて、気いもたせただんど、やつと、主人公登場や。

敏子 風太郎さん。

風太郎 なんや、敏子はん、こんなとこで何してんの？

敏子 何してんのんで、そんなことよう言わはる。ここで待つとけ言わはつたん、風太郎さんやないの。

風太郎 ああそうか、せやから、わし、家に帰ってきたんか。おう、ばばあ、元気か？

光子 親に向こうて、なんて言い方や。

風太郎 ほんなら、母上元気で御座るか？お猿のお尻は真っ赤かで御座る。

平太郎 なんで、こんなはんばもんできたんやろ。

風太郎 おう、まだ、生きとつたんか。

平太郎 風邪ひいてんねん。病人には優しいんやろ。

風太郎 あ、そうか、そらよかった。

平太郎 かわいそうや思ってくれへんのか？

風太郎 とりついた病気の方がかわいそや。

平太郎 …。

風太郎 相変わらず、きつたない家やなあ。敏子はん、よう見ときや、これがわしの家や。チマチマして、人情や何や言うてるけど、単なる貧乏人や。自分慰めとうるだけや。

平太郎 その貧乏人に大きしてもうたん誰や。

風太郎 なんやと。

平太郎 かにん。

風太郎 むつかしいこと言うな。(作造を見る)せやけど、おもろい格好しとるなあ、どうしたん、おっちゃん。

作造 ガマの油売りの正装やがな、風ちゃん、忘れたんかいな。

風太郎 そう言うたら、昔、そんな格好して、いちびってたなあ。

作造 いちびってた…。

風太郎 いちびつても、暮らせる世の中やってん。

作造 そうかもしれへん。

光子 何を感じしてんの作造さん。風太郎も、そんなところにおらんと、家に上がり。

風太郎 ここでええ。

風太郎座り込む。風の音。風に戸とともに押される昭。女達の悲鳴。明かりが一瞬暗くなり、戻る。

風太郎 静かやなあ。遠くで虫の音が聞こえる。

平太郎 チンチロチンチロチンチロリン。

作造 そんなん聞こえるか？

光子 いちびつてますねんがな。

作造 なんやいちびつてんのんかいな。わしアホやさかい、いちびるんやったら、いちびる言うてもらわんと。

風太郎 最初に勤めたんが酒屋やった。

平太郎 お前、酒好きやよって。

風太郎 親父と一緒に、小学校からのんどったもんなあ。

平太郎 酒癖悪かった。

風太郎 酒屋やったたら、なんぼでも飲める思たんやけど。

瓦が飛んでくる。それを片手で避ける。

平太郎 お前、家の中におるんか？それとも、そこ、外か？

風太郎 喉乾いたよって、缶ビール一本飲んだら、盗人や言われた。腹立って、店の酒やビールや醤油、みんな割ったった。気持ちよかったなあ、すーとした。

平太郎 それから、パチンコやか？

風太郎 パチンコは好きやけど、自分が出来へんのでおもろない。店長と喧嘩して、パチンコ玉床にまいたった。みんな、コロコロ滑りよって、面白かったなあ。ほんで、次はお父ちゃん何やったかいなあ？

平太郎 お前のことやから、映画館か？ゴジラ好きやったよって。

風太郎 何を言うてるんや、わしの好きなのは、片岡知恵蔵や。あの時は片目の運転手、そして、その実体は

平太郎 正義と真実の人、藤村泰造。バンバン。ほんで、映画館は何でやめたん？

風太郎 ちゃうちゃう、映画館と違う。かってにわしの人生つくるな親父。次はストリップや。

平太郎 ちよつとは、大人になったんやなあ。せやけど、それええなあ。わし、一生のうちいつぺんでもええから、布施の毘生シヨウのかぶりつきでストリップ見てみたい。

作造 わしは、相撲を升席で見たい。

昭 僕は、すき焼きを一人だけで食べてみたい。

平太郎 みんな、男の夢やなあ。

風太郎 ほんま、ささやかな夢やなあ。まあ、年寄りはいえとして、お前どさくさに紛れて何言うた。若いもんが、すき焼きを一人だけで食べてみたいやて。

作造 せやけど、いつかは出来ると思てるうちに、年取っていくもんやで。そんなもんやで。

突風、風太郎、下手の端まで飛ばされる。突風逆向き。オツトツト、けんけんで又、舞台中央。

風太郎 ストリップも、切符もぎってたら、何もおもろない。

平太郎 ほんで、次は何や？

風太郎 もう、人に使われるんは、止めや。もっと、大きな事やつたる。

婆さんが飛んでくる。風太郎、無視。若い女が飛んでくる。風太郎、片手で受けとめる。もがく女。看板が飛んでくる。風太郎の頭にあたる。女を離す。女、飛んで行く。洗濯板が飛んでくる。下着が飛んでくる。掴んで、頭にかぶる。幕に乗った魔女が、飛んで行く。

風太郎 いろんなもんが飛んで行きよるなあ。あつ、石切さんが飛んで行く。

作造 そんな、神さんが見えるんかいな。せやけど、ほんまに飛んで行つてしまはつたらどないしょ。

風太郎 あれ、歌うとたはる。

敏子 いしきり、いしきり、いしきりですか！

平太郎 もう、大体見抜かれとるなあ。

風太郎 アツ、プレイバック、プレイバック、アツハツン…

昭 時代が、ちよつとずれてんのちゃいますか？

風太郎 ずれてんのはお前の顔じゃ。

風太郎、風に巻かれるように踊る。

風太郎 愛して、ハア—

夢見て、ハア—

恋して、ウ—

光子風太郎、中入り。そんなところにおつたら、危ないがな。

風太郎 台風なんか、怖いことあるかい。貧乏の方がよっぽど怖いわ。こんな家、潰れてもうた方が、せいせいするわい。もう、チマチマ生きるんがいやじゃ。なんか言うたら、石切さん、石切さん言うところけど、がきの頃、お前やつたら、怒られへんさかい言うて、さい銭拾いに行かしたんは誰や。

光子 ちよつと、借りた事はある。

昭 弟が兄貴かしらんけど、英世さんとはえらい違いや。

風太郎 誰の話しや、わいには兄弟なんかおるかい。それとも、おかあちゃん、わしの留守中に生んだん？

平太郎 ほんまか、光子。

光子 …。あほ。

昭 何や、嘘かいな。そら、僕らは、かど通る人みたいやから嘘ついても、ばれへんわなあ。

作造 嘘言うたら、風ちゃん、あんたも人の事言われへん。つい、

最近まで、孫の通信簿見るまで、ずーと1が一番ええ思てた。

平太郎 ええ、そうと違うの。

作造 べつた。一番ええのは5や、うちの孫なんかみんな5やで。

平太郎 光子、お前知つてたんか？

光子 喜んでるんやから、水さす事もない思て。せやけど、本人見て、分からしませんか？

平太郎 ……。

風太郎 そや、いつまでも台風と遊んでられへん。家に入る。

風太郎、戸から、風に飛ばされるように家に飛び込んでくる。

昭、ひっくり返る。

風太郎 お父ちゃん、いや、お父上。お母ちゃん、いや、母上。

平太郎 なんかたくらんどるでこれは……。

光子 お金やったら、ないで。お前、貧乏人、貧乏人ってせんど言
うたやないか。そんな貧乏人からお金持つていく事ないやろ。

風太郎 言うたな、くそばばあ。

光子 母上から、くそばばあか、なさけない、なさけない。（目頭
を押さえる）

敏子 お母さん泣かしたらあかん。うちら孝行しとつても、いてへ
んのよ。

風太郎、腕組をして目を閉じる。

敏子 謝つて、風太郎さん。

風太郎 （おもむろに目を開けて）ごめんな、くそばばあ。

平太郎 まだ言うとするがな。

敏子 私、考えなおそかなあ、もうちょっとええのがあたりそう
な気がする。

風太郎 借りた金は、百倍にでも、千倍にでもして返したる。これ
が証拠や。

風太郎、ポケットから、地図を取り出す。

平太郎 汚い地図やなあ。あっちゃこつちや虫食いの穴あいとるや
ん。

風太郎 国定忠治の財宝のありかの地図じゃ、驚いたか貧乏人。

作造 国定忠治で、そんな金持ちやったん。

風太郎 財宝のありかの地図あるんやから、そうちがう？おつちや
ん。

光子 なんか頼りない話しやなあ。

風太郎 どつちにしろ、目指すは赤城山や。

光子 お前、その地図、どつちが北か分かるか？

風太郎 ……。

光子 せめて、地図の勉強してから行つたらどうや。

風太郎 そんなことしたら、人に先越されるがな。日の上がる方
が東や、それさえ分かつたらええ。

平太郎 地図で日の上がる方分かるか？

風太郎 （地図をじっと見る）

光子 月はどつちから上がるんや？

風太郎 …。むつかしい事言うな。わしは行くんや、生駒山に。

平太郎 赤城山ちゃうの？

風太郎 まあええから、とにかく行かして。

敏子 うち、なにしにきたんやろ？

風太郎 金借りよと思たから、そんな時の質札。

敏子 うち、質札？

作造 あんな事、口では言うとするけど、年寄り残しとくのが心配で、嫁さん見せがてら、帰ってきたんやろ。

平太郎 そうでも思わな、救われへんなあ。

作造 ほんなら、そう思とき。

風太郎、六方を踏む。

風太郎 さあ、行くでえ、帰ってこられへん旅かもしれん。せやけど、行かなきゃならない荒海の、女、乗せない宝船、石切神社のつるぎを背おて、いざいざいざ、いいいざあ。

風太郎、戸口に走る。昭を見て。

風太郎 お前も、すき焼き一人で食べられるように頑張れよ。

昭 ありもせえへん宝もんより、すき焼きの方が旨いわい。

風太郎 あるかあらへんか、行ってみなわからへん。おっ、忠治が呼んでる、風の音に混じって俺にははつきり聞こえる。はよこんかい、何しとるんや言うてる。

風太郎、戸をつき開け飛び出し、下手に消える。

平太郎 行ってまいよった。体に気いつけやの一言もなかったなあ、光子。

光子 情けないけど、しやない。カスでも、うちの子やねんさかい誰にも文句いえへん。せやけど、行ってしもたら、何やスカみたいやなあ。

敏子 うちは、風の忘れ物みたい。何しに、ここへ来たんやろ。

昭 そういうたら、質札言うてましたなあ。

光子 これ、結構傷ついてんのに念押しせんでもよろしやる。

敏子 ええねん、出がらしから質札やもん。

作造 風ちゃんは、照れ屋から思てることよういわんだけや、ほんまは、ええ子なんやで。

平太郎 おおきに作やん、風太郎が万引きしたときも、あんた近所の人に言うてくれたんやてなあ、風ちゃんは悪ない、あの家の貧

乏が悪いんやて。あん時は、家に火いつけたるか思たけど、よう考えたら、うちも一緒に燃える。

光子 作造さんの言うことが正しい。子どもは悪ない。親が悪いんや。

平太郎 せやけど、今度の宝探しも一人か。ほんま、しょうもない奴やけど、徒党を組むのが嫌いで、やるときはいつも一人や、それが、あいつの、たった一つのええとこや。

労務者風の男、A、B、C、D、E、下手から登場

A 大将、行きまひよか。ありや、居てへんがな。

作造 しっかり、徒党組くんどるがな。

平太郎 いつの間にか、徒党組むような情けない奴になってんな

あ。せやけど、あいつは、まだいっぺんも、警察のやつかいになつた事はない、それが、あいつのたった一つの…

光子 お父ちゃん。

B おらんようになってたら、困ることよ。わい、まだうるん一杯しかくわしてもうてへんがな。

C 国定忠治言うとなあ。（作造を見て）おっさん、ええかつこしてやるやん、芝居しよ。

作造 子分はいややで。

D しゃない、忠治やり。

作造、舞台中央に立つ。A—E作造の周りに膝まずく。

作造 さあて、お立ち会い

手前、ここに取り出しましたのは、陣中膏は四六のガマだ。縁の下や、そんじよそこらにいるガマとはガマが違う。あんなものには薬石効能がない。手前のは常陸の国は関東の霊山、筑波山で獲れた四六のガマだ。四六、五六はどこでわかるか。前足の指が四本、後足の指が六本。これを名付けて墓は四六のガマ。一年のうち、五月、六月、八月、十月に獲れるところから、一名五八（こはっそう）の四六のガマとも言う

E なにが、さあて、おたちあいや、おっさん、忠治やで、国定忠治。

作造 わし、これしかできへんもん。

風の音。

平太郎 なんや、又、風がきつうなってきたみたいや。

風太郎、飛び込んでくる。

風太郎 どないしたんみんな、お百度石のところで待っといてくれ、言つたやろ。

A 風や雨がきつうて。

風太郎 なに言うてるんや、赤城山はもつときびしいで、さあ、行った、行った。

A これで、日当が千円やて、きついなあ。

風太郎 三食ついとる。

B わし、まだ、うろんしかたべさしてもうてへん。

幸子 私も、お百度石のとこまで連れて言つて下さい。

風太郎 突然物言うな、びっくりするやないけ。

幸子 嵐の中で、あの人のためにお百度踏ませて。

光子 よっしゃ、分かった。ほんなら、一回だけ、まわつといで。石切さんは百回まわらなあかんでいやらへん。一回でもかまへん。

昭 僕もついて行く。風よけぐらいにはなるやろ。

風太郎 何のこつちゃしらんけど、先行つて。わしも後から、お百度石の頭撫でに行くよつて。

平太郎 まちごても、さい銭盗むなよ。

風太郎 分かつてるわい、昔の俺とちゃうわい。

飛び出す、昭と幸子。風に戻される二人。

昭 手、つなご。

幸子 え、はい。

昭 不思議やなあ、何処の誰ともしらんのに、手つないで神さん参るやて。それも、嵐の日に。

昭と幸子、下手に消える。

舞台中央で、下を向いて、もじ、もじする風太郎。

光子 どうしたんや、風太郎

風太郎 忘れもんや、敏子はん、これ（手紙を片手で顔を背けたまま突き出す）

敏子 何？

風太郎 手紙や、わいが生まれて初めて書いた手紙や。

敏子、手紙を受け取る。

風太郎 さあ、行くで。みんな、バイバイや。

風太郎とA、C、D、E一列になって、戸に向かって走る。そして、戸を突き抜け、下手に消える。Bだけ逆に走る。気がついてUターン。

光子 なんて書いたんのん？

敏子 雨に濡れて読みにくい。えーと、としよりをよろしうたのん
まっ

平太郎 ちよつとは親の事考えてくれてんねんなあ。

光子 あれなりに世の中でもまれてんねんやろう。

敏子 まだ、書いてある。

光子 なんて？

敏子 (胸に手紙を押しつけて) 雨で流れてしもた。

光子 嘘や、読めたんやろ。

作造 わし、見えたで、言うたるか。

敏子 いや、言うたらあかん。

作造 ほんなら、自分で言い。

(間)

敏子 すきやっつて、ひらがな三つ。

激しい風の音、そして、暗転

6

川のせせらぎ。小鳥のさえずり。鶯の鳴き声。
舞台やや上手に昭。

昭 あれから、すき焼き一人で食べてみたけど、ひとつも美味しい
なかつた。すき焼きは、人と肉を争うて食べて、はじめて、美味
しいもんかもしれへん。

昭、上手に歩く。

昭 あの二人、結婚したんやるか？

昭、川をのぞき込む。

昭 猫は見つかったんやろか？

正面を見る

昭 何んも、分からへん。分かるすべもあらへん。

(間)

昭 しらんもんどうしが神さん参り(掌を見る)まだ、あの娘の掌の温もりが残っているようや。

憲子、妙子の手を引いて下手より登場。

憲子 ほんまに、お父ちゃん、何処へ行つてしもたんやろ。ちよつと目はなしたら、おらんようになってしもて、ほんまに、もう。

妙子 喉、乾いた。

憲子 しゃない、(財布から小銭をだして妙子に渡す)その自動販売機で、ジュースこうといで、おかあちゃんの分もこうときて。

妙子 お父ちゃんのは？

憲子 いらん。

妙子、下手に去る。

憲子 久しぶりに、お父ちゃんの玉造の実家によつて、妙子のお尻にでんぼができて困つてる言うたら、お義母さんが、そら石切さんや、石切さんや、でんぼの神さんや言いださはつて、ええかげんにあしろてたら、帰り道やないの、私の孫になんか恨みでもあんのん言いださはるしまつ。たまにしかあわへんねんから、言うとおりにしたげんのも親孝行、しゃない。

妙子、ジュースを持って、下手から登場。憲子ベンチに腰を下ろす。

憲子 あんたも、座り。ああ、そうやなあ、お尻いたかつてんなあ。ほんなら、立って飲み。

二人、ジューズを飲む。

憲子 桜、綺麗なあ。ほんまに、春爛漫……。せやけど、緑の多い、ええとこやなあ。大阪のほん近くに、こんなとこあるて、うち、しらんだ。それに、神さん参りやて、日頃、何にも信心してへんけど、わりに、気持ちの、ええもんやなあ。

妙子 あっ、お父ちゃんや。

昭、振り向く

昭 何や、お前らか。

憲子 何ややて、参道から、ふっと、おらんようになるんやから。

昭 二十年前、ここで占うてもうたことあんねん。屁踏んだみたいな会社の先輩がおって、

憲子 どんな先輩やろ。

昭 見合いたんはええけど、どないしよ、どないしよて、迷てるさかい、玉造のお母ちゃんがよう当たる言うてる石切さんに行つて、聞いてきたるさかい言うて、来たんや。その時、ついでに、ええ言うてんのにわしの手相を見てくれた。(憲子の顔をじっと見る)

憲子 何やの、気色悪い。

昭 べっぴんさんの嫁さんもらう言わはった。

憲子 当たってますがな。

昭 かわい子に恵まれる。

妙子 その占い、ものすごう当たるね、お父ちゃん。

昭 幸せな親子やなあ。それに、こんな事も言うてた、上の人に可愛がつてもうて出世も早い。

憲子・妙子 それは、外れや。

(間)

昭 ほんま、あたへんだなあ。先輩は、あかん言われた人と結ばれて、子供が三人、幸せにしたはる。それに比べて、わしは、上司に可愛がられるどころか、とことん嫌われて、いまだに社員。それに……。

憲子 ……。

昭 いまさら言うてもしやあない、ほな、行こか。(妙子のお尻を叩く)

妙子 痛い、お父ちゃんが、でんぼたたいた。うああああ。

昭 かにん、かにん、わしらここにおんの、お前のでんぼの

せいやつてんなあ。

妙子 痛い、うあああ。

昭 謝ってるやないか、もう、泣き止み、でんぼみたいな顔して。

妙子 お父ちゃんが、でんぼみたいな顔言つた、うあああああああああ。

憲子 でんぼに顔ありますん？この子がでんぼやったら、あんたは、でんぼの親か。

昭 ……。さあ、泣き止んで、はよ、石切さん参る。

三人が肩を並べて歩き始める。三人をスポットライトが照らす。スポットライトの中で参道を降りていく。

妙子 いろんなお店がある。蛙の上に蛙、又、蛙。ケロケロ、可愛い。

憲子 人形供養。人形も、遊ぶだけ遊んでぼろぼろにして、ほってしまふんやのうて、こうして供養するんやねえ。

昭 なつかしい駄菓子があるなあ。甘い豆を砂糖で巻いたほうてん。これは、星の光や。小さい星の形したおかき。大きな揚げせんべえは、大丸奴言うんや。これなんや分かるか？

憲子 カルメラ焼き違いますの？

昭 わしらは、こたつ言つた。ほら、格好がよう似てるやろ。

妙子 お父ちゃんよう知ってるなあ。

憲子 駄菓子屋のぼんぼんやさかい。

昭 これで、大きしてもうたようなもんや。ほうてん一つもらおか。

微かに、バイオリンの音。

昭 えつ。

憲子 何か？

昭 いいや、別に。チャンチキおけさ聞きそびれたなあ。

上手にスポット。演歌師の衣装の平太郎、チャンチキおけさを弾く。

平太郎 月がわびしい路地裏の、

昭 屋台の酒のほろ苦さ。

平太郎 知らぬどうしが、小皿叩いて、

昭 チャンチキおけさ

平太郎 おけさせつなや、あいた、又、顔弾いてもうた。

小さくチャンチキおけさ。

妙子 あっ、大仏さんや。

昭 石切大仏か。前にはいたはらへんだと思う。立派なもんやなあ、手、合わしとこ。

(間)

憲子 耳ダレ、耳ナリ、人の数だけ病気もある。

昭 洋服屋に八百屋、おもちゃ屋、漢方薬局、占い。神さんも一緒にこの町に住んだはるみたいや。

(間)

妙子 たこ焼き、お好み焼き、おうどんやさん、釜飯。

昭 お参りしてから、帰りに食べよ。どれにするか、妙子よう見と

き。 憲子 うちは、七味こつて帰る。

昭、平太郎の方を振り返る。

昭 あのら、元気にしたはるやるか？ たった、一日の事やったけど。

憲子 え？

昭 いいや、なんもあらへん…。せやけど、二十年か…。ようしらんけど、お能の舞台では、ぽーんと飛んだら百年が過ぎるらしい。それやったら、二十年は一足か…。

(間)

昭、妙子の手を引いて客席に降りる。憲子は下手に消える。

昭 なあ、妙子、人生って言葉分かるか？

妙子 うん、まあ…。

二人をスポットライトが照らす。

妙子 そんなきつう手にきらんでも、迷子にならへん。

一人手をつないで歩く。妙子少し遅れる。

昭 疲れたんか？

妙子 うん。

昭 おんぶしたるか。

妙子 うん。

昭、妙子を背負う。スポットライトが少しずつ小さくなる。

妙子、昭の肩に顔を預け眠ってしまう。小さくバイオリン演

歌「船頭小唄」が流れる。

昭 妙子、人生で、もし迷子になったら…。

(間)

昭 道を教えてくれる人よりも、一緒に迷うてくれる人を探し。

スポットライト消える。

バイオリン演歌が小さく流れる。

—幕—

平成 10年 12月 31日

参考資料 大道芸口上集 久保田 尚

評伝社